
 学 会 記 事

第 12 回新潟胆膵研究会

日 時 平成 23 年 9 月 10 日 (土)
午後 2 時～

会 場 万代シルバーホテル 5 階
万代の間

I. 一 般 演 題

 1 頻拍性不整脈合併肝胆膵手術の周術期管理
—新潟市民病院の取り組み—

横山 直行・大谷 哲也・傳田 定平*
新潟市民病院消化器外科
同 麻酔科*

循環器治療進歩に伴う心血管系疾患患者の余命延長と、血栓・塞栓症に対する医療者・患者の意識向上から、循環器疾患合併患者や抗血小板・抗凝固療法中患者に対する手術機会が急速に増大しつつある。なかでも頻拍性不整脈は頻度が高く、その病態の多様性から周術期管理に難渋することも多い。本発表では、当院の肝胆膵手術例における頻拍性不整脈対策、特に塩酸ランジオロール（オノアクト）を用いた心拍・血圧コントロールの有用性と、周術期血栓症発生予防の取り組みについて報告する。

2 当科における急性胆嚢炎に対する腹腔鏡下胆嚢摘出術施行例の治療成績

角南 栄二・黒崎 功*・畠山 勝義*
白根健生病院外科
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野*

2007 当科で施行した急性胆嚢炎に対する緊急

腹腔鏡下胆嚢摘出術（以下緊急 LC）19 例を検討した。

【結果】男女比 12/7，平均 60.8 才，胆嚢炎の重症度は重症 6 例，中等症 3 例，軽症 10 例であった。全例 3 ないし 4 ポートで行い，開腹移行例は 4 例（21%）に認め，重症例で 3 例，軽症例で 1 例であった。術後合併症は重症例にて 1 例（5.2%）認めしたが保存的に軽快，平均在院日数は 8.8 日，病理組織診断では全例良性であった。

【病理所見】中等症，軽症胆嚢炎については緊急 LC は有用な治療であることが示唆された。重症胆嚢炎は開腹症例の問題や，胆嚢癌の術前診断を含めた適応などの点から，内科の協力を得た慎重な対応が要求されると考えられた。

3 胆嚢・十二指腸間にチューブステントを留置した胆嚢炎症例の検討

五十川 修・高橋 祥史・林 和直
佐藤 俊大
厚生連刈羽郡総合病院内科

高齢化等により胆嚢摘出術が困難な胆嚢炎症例も増加しており，このような患者の治療には苦慮する。当科では 2002 年 12 月から 2011 年 5 月までの間に胆嚢炎患者 16 例に対して，胆嚢・十二指腸間にチューブステントを留置した。このうち評価の可能であった 14 例の検討を行った。14 症例に 16 回の留置を試み 15 回で可能であった。PTGBD を先行していた症例が 11 症例 12 回であり，チューブステントを ERCP にて留置したものが 5 回，経皮的に PTGBD ルートを用いて留置したものが 8 回，PTGBD ルートと ERCP を併用したものが 2 回であったが 1 例は胆道鏡を併用していた。留置後 7 ヶ月までに 3 例に胆嚢炎の再発がみられたが，一方で 5 年近く再発していない症例もみられた。手技の煩雑さや再発が問題であるが，手術が困難な胆嚢炎症例に対して試みる価値はあるのかもしれない。